

鎌倉市教育委員会 令和6年10月定例会会議録

○日時 令和6年(2024年)10月16日(水)

9時30分開会 10時17分閉会

○場所 鎌倉市役所 402会議室

○出席委員 高橋教育長、下平委員、朝比奈委員、長尾委員

○傍聴者 4人

○本日審議を行った案件

日程1 報告事項

(1) 教育長報告

(2) 部長報告

(3) 課長等報告

ア 行事予定

(令和6年(2024年)10月16日～令和6年(2024年)11月30日)

日程2 議案第19号

鎌倉市立小・中学校県費負担教職員人事異動方針について

日程3 議案第20号

鎌倉市社会教育委員の委嘱について

高橋教育長

定足数に達したので、委員会は成立した。これより10月定例会を開会する。本日の会議録署名委員は朝比奈委員に依頼する。本日の議事日程は手元に配付したとおりである。それでは日程に従い議事を進める。

1 報告事項

(1) 教育長報告

高橋教育長

スポーツ、文化の秋ということで、今週の金曜日には、陸上記録会が開催予定である。私からは3点報告する。

まず1点目としては、スクールコラボファンド関係についてである。以前この教育委員会で私の兼職兼業について承認を得たが、経済産業省の会議に約半年間、委員として参加してきた。そこでは公教育に人、物、金を結集させるというのが一つの目的で、この度報告書を取りまとめた。報告書では自助、共助、公助という防災で考えられるような言い方で整理している。教育をそこに当てはめると、公助というのは当然学校教育などで見ていくところであり、自助というのは各家庭の方針によりスイミングスクールや英語教室など自費で子どもたちの学びを得ていくところとするならば、その中間にある共助があると良いということがまとめの中にある提言であった。この共助という部分の施策の代表例がスクールコラボファンドだと思っている。これまでもガバメントクラウドファンディングを毎年やってきた。11月からまた新たに進めたいと思っているが、より持続可能な取組にしていけないといけないと思っている。寄附も最初は集まりやすいが、だんだん集まりにくくなってくる。今までやってきたこととしては自動販売機型の寄附ということで持続可能な資金調達をしていることに加えて、まだこれはリリース前だが、寄附をさらに推進していくような企業からの協賛金的な仕組みもできないか、あるいは信託銀行と連携して商品の運用益を寄附してもらうようなモデルも検討しているところで、時期が来たら外部にも説明していきたいと思っている。こういった新たな取組も含めて、資金調達の共助の仕組み作りを進めていきたいと思っている。

そして鎌倉市としては先般一般社団法人日本承継寄附協会と協定を結んだ。これは遺贈寄附の推進に向けて、周知や広報の点で連携していくという協定である。遺贈というとお金持ちが行うものという考え方があがるが、必ずしもそうではなく、信託銀行や遺言書を準備して自分の親族に相続するというのももちろんのこと、日本全体あるいは次世代の鎌倉の子どもたちに繋ぐという意味で地域全体に相続するというような考え方もこれからはより一般的なものになっていくと思っており、そういったところで連携していきたいと思っている。条例によって基金化されたスクールコラボファンドがその受け皿になっていけば良いと考えており、また進捗を報告していきたいと思っている。寄附金の協力や、広報等については多くの方の協力を得ながら進めたいと思っている。

2点目は放課後エンパワーメントプロジェクトについてである。NPOのチャンスフォーチルドレンと鎌倉市が連携して進めることになった。資金は三井住友フィナンシャルグループからの寄附を原資にしている。就学援助世帯や生活保護世帯の子どもたちは、先ほど話したところ言えば自助の部分であるが、放課後や土日の費用がかかる体験や、学びの場に参加することが難しい。その教育格差がコロナ禍や物価上昇によってより広がっているのではないかということがチャンスフォーチルドレンの問題意識である。これについて我々も共感し、電子クーポンという形で家計の難しさを抱えている子どもたちに対して、この度サポートしていくという事業を進めることになった。

これ自体は成果検証を踏まえて、今後どのように続けていくか、こういった形にしていくかというところはまた考えていきたいと思っている。大事なことは、子どもたちの放課後の居場所や体験をしっかりと確保していくことが本質だと思っており、これは中学校で考えると部活動をどうしていくかという話にも繋がっていくので、そことセットで子どもたちが学校外に出たときの居場所や体験というところも、教育委員会としても思いを致していかなければならないと思っている。

子どもの学習費というところで考えると、学校外学習費が、家計の教育費の支出の約7割を占めている。一方で給食費は約7%となっている。高所得、中所得、低所得世帯もいる中で、どの教育費をどのようにサポートしたら良いのか、子どもたちが自ら学んでいくことをどう応援できるかは、決め打ちでは

なく総合的に考えていかなければならないと思っている。更に、教育の機会確保だけではなく、教育の質向上そのものも大事である。来年度に向けて教育大綱の議論が進んでいるが、教育委員ともディスカッションしながら、重点プロジェクトや重点的な方向性を示していきたいと思っている。

3点目だが、先日「北条氏 150 年栄華の果て－鎌倉幕府滅亡－」という企画展を見るため、鎌倉歴史文化交流館に行ってきた。非常に素敵な展示だった。足利尊氏が鎌倉に幕府を置こうとしていたと思われる直筆の書状や太平記絵巻等の貴重な資料があった。この資料を踏まえて鎌倉幕府滅亡を解き明かすという内容で、学芸員の思いのこもった展示になっている。私もよくよく勉強したが、北条時行というあまり着目されないような人物が幕府の崩壊後、3度も鎌倉を奪還しているというような事実を紐解いていた。北条時行は漫画やアニメの「逃げ上手の若君」で非常に人気で、鎌倉歴史文化交流館の X でもファンの話題となっており、非常に注目度の高い展示になっている。鎌倉殿の 13 人もそうだが、日本のメディアコンテンツの豊かさの内側、中心部にはこういった文化財や文化は必ずあると思っており、我々としてはこういったところを温めながら、世界、日本にも発信していかなければならないと思っている。来年は東アジア文化都市交流事業という新たな大きなプロジェクトが始まるので、そういったところにも繋げていきたいと思っている。

林委員

かまくら ULTLA プログラムの森のプログラムが始まった。第 1 回目が 10 月 12 日の土曜日にあり、私も参加した。感想としては、子どもたち一人一人の居場所が必要であるということに非常に感じた。

一所懸命話を聞いている子ども、話を耳にしながら他所を向いている子ども等いろいろな子どもがいたが、子どもたちは同じ空間の中のそれぞれの居場所にいるということを感じた。学級を居場所にする教員がよく言うが、学級を一つの居場所にしてしまうと、窮屈な子どもがいると思う。これからの学級での児童、生徒への指導は、子どもたち一人一人に居場所があり、それを 1 つの学級というくくりの中でどうするかという視点で考えていかなければならないということを実感した。

高橋教育長

先日森のプログラムの 1 日目を開催した。2 週間後に 2 日目、3 日目を行う。子どもたちによっていたい場所が違い、関心のあるテーマも異なっていて、そこを踏まえながら自分たちで学びを選び取っていく、選択していくというところを重視したプログラムになっていると思う。今回の参加者は海のプログラムと似ており、学びの多様化学校の入学を希望している子どもたちが半分以上参加しているプログラムだった。学びの多様化学校もこういう雰囲気の間になるのではないかと強く感じられた場だった。上手くいったところもあり、課題が残った部分もあるので、2 日目、3 日目に繋げるとともに、さらに学びの多様化学校に繋がっていく連続性のある捉え方をしていきたいと思っている。

また、各学校にフリースペースができた。教育委員には視察いただき感謝する。学校ごとのテーマや運用方法は違うが、子どもたちからも人気があり、居やすい場所になっている。ソファや寝転がったり直接座れたりするスペースが子どもたちに人気とのことである。子どもたちのそれぞれの個性や特性に応じて学び取っていける、自分で選べる場になると良い。またフリースペースでパワーを充電して、学校や教室での学びに向かっていけるようになると良いと思っている。

(2) 部長報告

教育文化財部長

私からは市議会9月定例会の最終結果を報告する。市議会9月定例会の本会議が10月2日に開催され、教育文化財部からは3つの議案を上程した。まず1つ目の鎌倉市生涯学習センター条例の一部を改正する条例に関しては総員の挙手によって可決された。2つ目の中学校給食事務や学校施設、史跡整備等に関する補正予算第4号については、一部反対意見があったが多数の挙手で可決された。3つ目の学びの多様化学校外構工事に関する補正予算第5号は、総員挙手で可決されたという状況である。市議会関係は以上である。

私からはもう1点、かまくら ULTLA プログラムの森のプログラムについても報告する。林委員からも報告があったが、やはり様々な特性を持つ子どもがいるというのが現実で、その場にいられなくて外に出て行ってしまった子どもも実際にいた。ステージが変わったときに迎えに行ったら戻ってきてくれたり、話を聞いてくれたりもするが、その子どもの興味を引くようなことをこちらが提供しなければならぬと強く思った。また浄智寺の縁側の端に2人の子どもがずっといた。誰とも付き合えないようなタイプの子もだったが、2人にはそこが居場所になっていた。特性がある子どもはこういう狭い場所が好きということを感じた。今後フリースペース等でもそういった居場所を考えながら作っていかねばならないということを感じた。

高橋教育長

我々の意図通りには必ずしもいかないもので、大人がデザインしすぎないこと、子どもたちと一緒に作っていくという考え方が大事だと思った。

(3) 課長等報告

ア 行事予定

(令和6年(2024年)10月16日～令和6年(2024年)11月30日)

高橋教育長

次に報告事項のア「行事予定」について、記載の行事予定で特に伝えたい行事等があれば報告をお願いする。

(教育文化財部)

特になし

(質問・意見)

特になし

(行事予定報告はそれぞれ了承された)

2 議案第 19 号 鎌倉市立小・中学校県費負担教職員人事異動方針について

高橋教育長

次に日程の 2、議案第 19 号に入る。「鎌倉市立小・中学校県費負担教職員人事異動方針について」議案の説明を願いたい。

学務課担当課長

日程第 2、議案第 19 号「鎌倉市立小・中学校県費負担教職員人事異動方針について」説明する。議案集 8 から 9 ページを参照願いたい。

本件は、県費負担教職員の人事異動に係り、令和 7 年度（2025 年度）の鎌倉市における教職員人事事務が円滑に行われるよう、基本方針を策定しようとするものである。鎌倉市では、次の 3 点を人事異動の重点とした。その 3 点とは、「1 鎌倉市教育大綱を及び各学校のグランドデザインの具現化を目指した適材・適所の配置」、「2 学校の柔軟な運営及び体制の強化を目指した年齢・経験などにとらわれない人事配置」、「3 幅広い視野と多様な経験を有する教職員の育成を目的とした他市町及び行政機関との人事交流」である。

1 つ目の「鎌倉市教育大綱及び各学校のグランドデザインの具現化を目指した適材・適所の配置」では、鎌倉市教育大綱の方針に基づき、各学校が示したグランドデザインを実現させるためには、適切な人材の確保とその配置が求められるところである。教育委員会としては、各学校長の要望をかなえるよう、教職員の異動について極力配慮したいと考えている。

2 つ目の「学校の柔軟な運営及び体制の強化を目指した年齢・経験などにとらわれない人事配置」では、年齢・経験にとらわれず意欲・能力のある者を積極的に総括教諭あるいは管理職等に登用し、児童生徒・学校の実態に即した柔軟な学校運営を目指すことにより、学校マネジメント機能の強化や業務負担の軽減、職場環境改善の取組を推進したいと考えている。

3 つ目の「幅広い視野と多様な経験を有する教職員の育成を目的とした他市町及び行政機関との人事交流」では、他市町や行政機関での経験を生かして、鎌倉の教育を担える人材を確保するために、各関係機関に積極的に働きかけて人事交流を行いたいと考えている。

また、教職員の資質・能力向上を図るため、湘三管内での 3 年間の交流を目的とした湘三管内一般教職員広域人事交流制度についても、積極的に活用したいと考えている。これらの重点をもとに、関係機関の積極的な協力のもとに、教職員の適正な配置に努めていく。

(質問・意見)

林委員

2 つ目の「学校の柔軟な運営及び体制の強化を目指した年齢・経験などにとらわれない人事配置」について、管理職も含めた職についての話があったが、初任、3 年目、10 年目、15 年目、総括教諭それぞれ

が職務、仕事をする内容が違ふと思うので、人事を決める際は、例えば総括教諭であるならば総括教諭がこういう職、5年目の教員はこういうことをしているということをぜひどこかで示してほしい。特に教諭が総括教諭になったときの仕事の内容が、教諭プラス的な総括になってしまって職になりきれないことが多いと感じる。

昔話だが、教頭への昇任が決まり、前の教頭先生と引継ぎをしていた際、当時の校長先生から「あなたは職が変わったので、よろしくお願ひします」と、その一言だけを言われた。そこで教頭職とは何なのかということを考える時間があった。自分がなった職はどのような仕事があるか、5年目は何をどのくらいできるのか、15年経ったらどうすれば良いかということ、色々な研修の場で伝えていったらより良い学校運営になるのではないかと感じている。

学務課担当課長

神奈川県では、臨時研修や新任総括研修、教頭、校長の新任管理職研修を行っている。鎌倉市としても、教育センターとも連携をとりながらその職がどういうものなのか、その年次ではどういう仕事ができなければならないのかについて、教員本人が把握した上で仕事を進められる体制作りをしていきたい。

高橋教育長

教員が何年目でどれぐらいのことができるかを定めた育成指標が神奈川県にある。特に総括教諭に上がるタイミングでは、今一度指標を確認し、それを明確に伝えていく必要がある。またそれに従って評価をできれば良いと思う。

長尾委員

今回の方針は去年の方針と比べてどこが一番変わっているか。また、総括教諭は何をするべきであるという役職別のミッションのようなものはあるか。

学務課担当課長

神奈川県でも人事異動方針を出しているの、鎌倉市の人事異動方針はそれを基に作っている。基本的には昨年度と変わらないが、令和7年度（2025年度）は教育大綱の改定があるので、1番に教育大綱という言葉を入れたところが昨年度と違うところになっている。

総括教諭については、それぞれの学校のグループリーダーという立場になる。各学校、校務分掌があるので、その役割の中でリーダーとして活躍するというのが教員との1番の仕事の違いだと思う。また職員会議の前に総括教諭と管理職が企画会議を行う。学校全体のことも管理職と連携をとりながら進めていくところも大きな違いだと思う。職務については、神奈川県の研修で、こういう立場にあるということをお話しているが、鎌倉市としても職務についての意識を高められるように努めていきたいと思っている。

長尾委員

1点目について、2番、3番は昨年と変わらないということだが、2番の「学校の柔軟な運営及び体制の強化を目指した年齢・経験などにとらわれない人事配置」について、この人事配置は今年度も積極的に

行われたか。

学務課担当課長

管理職への登用は積極的に年齢にとらわれず対応しており、総括教諭についても、力のある若手の育成も含めて登用しているので、この方針に従って令和6年度（2024年度）の人事を進められたと思っている。来年度もこの方針に沿って進めていきたいと思う。

長尾委員

次年度以降この方針で良いかどうかを検討する際、当年度の実績や課題だったところ、上手くできたところについての話もあると、この教育委員会の場でも、こういう考え方を取り入れた方が良いのではないかな等の前向きな話ができると思う。今年度はどう人事が行われたかを具体的に教えてもらえると有難い。また役職別ミッションのようなものは言語化が大事だと思っている。ある程度言語化することによって目指すべき目標が見えてくると、それに足りないものも見えてくるので、言語化が可能かどうかの検討もしてほしいと思う。

高橋教育長

先程、学務課担当課長からも話があったが、総括教諭はグループリーダー及び校長や教頭を補佐するという役目になる。よく教育の世界では何年目、何年目と言ってしまいが、そこは職責に応じた軸やKPI指標が必要で、そこをどう評価してその次のステップに進んでいくか、そういった発想が大事だと思っている。さらに文部科学省は、「校長」、「教頭」、神奈川県では総括教諭にあたる「主幹教諭」に加え、「主任教諭」という全体を少しまとめていけるような職を提案していて、これを神奈川県としてどう実装していくかはこれからの議論になってくる。そうすると主任教諭としての職責もクリアにしていけないといけないので、求められる期待値とその指標はより整理していかなければならない。そこも踏まえてまた検討、話し合いをしていきたいと思う。

また人事異動以前の話で、教員不足がどの地域でも非常に課題、懸案事項になっている。特に小学校だと余剰人員がないので、休みに入った教員の後に入る教員がなかなかいない。また、中学校だと技術の教員の採用倍率は現在0.6倍ということで、県に要望しても来ないことは分かっているという状況になってきた。教科によっては非常に厳しい状況がある。県内の教育長会議でも県に強く要望していかなければならないという決議になるが、県に要望しても何も起こらないというか、ない袖は振れないという状態になっている。教育大綱で実現したい学びを行うために、人事異動の手前側の部分について市としてもしっかりと考えていかなければいけないと思っている。

（採決の結果、議案第19号は原案どおり可決された）

3 議案第 20 号 鎌倉市社会教育委員の委嘱について

高橋教育長

次に日程の 3、議案第 20 号に入る。「鎌倉市社会教育委員の委嘱について」議案の説明を願いたい。

生涯学習課長

議案第 20 号、「鎌倉市社会教育委員の委嘱について」提案理由を説明する。議案集 10 ページから 11 ページを参照願いたい。

社会教育委員は、社会教育法及び鎌倉市社会教育委員条例に基づき、定員数 10 名で設置されている。委員については、「学校教育の関係者」、「社会教育の関係者」、「家庭教育の向上に資する活動を行う者」及び「学識経験のある者」の中から選出している。この度、令和 6 年（2024 年）10 月 31 日をもって任期満了となることから、新たに委嘱しようとするものである。任期は、令和 6 年（2024 年）11 月 1 日から令和 8 年（2026 年）10 月 31 日までとなる。なお委嘱者については、現社会教育委員 10 名が引き続き選出となる。

（質問・意見）

特になし

（採決の結果、議案第 20 号は原案どおり可決された）

高橋教育長

議案は以上になるが、私から 1 点報告したいと思う。この度、朝比奈委員が文部科学大臣から地方教育行政功労者表彰を受賞された。長きに渡る鎌倉市の教育行政に関する功績が認められ、心よりお祝い申し上げます。朝比奈委員から一言お願したい。

朝比奈委員

この度大変名誉なことに、私が愚直に教育委員を続けてきたことを評価していただき、立派な賞状と金杯を賜った。今後も僧侶として、またかまくらエフエムの社長としても、深く教育行政に関わっていきたいと思っているので、何卒よろしくお願申し上げます。

下平委員

先程居場所についての話がありずっと色々なことを考えている。キャリアカウンセリングの歴史から考えると、産業革命が起こり工業化が一段と進んだとき、工場業務に馴染めない人たちが多く増えていったということがあり、それぞれ特性因子に合った職業選択が必要なのではないかということでマッチング理論が生まれた。工場の単純作業に向いている人にそういった作業をさせようという考え方から職業選択理論が起こった。しかしそうすると偏りが生じてきたり、その仕事の内容が発展しなかったり、個人が成長しなかったりという問題も起こってきた。そこからカールロジャースの人間性中心心理学とい

うものが生まれた。自分自身の望みや夢、希望、その人の可能性を大切にしなければならないという流れが起こった。どちらも大事だと思うが、今のこの世の中見ていると、例えば結婚もマッチング理論である。職業もパソコンで自分の希望を入れてマッチしたところに就職するという考え方になってきている。それなりに成長した大人であれば、それはそれで良いと私は思うが、小・中学生ということになると、色々なものに寄り添うことや、馴染むこと、そういうことも社会性の一つだと思う。例えば、小学校で気が合わない友達、合わない教員がいたり、この教室は何か居心地が悪いということが皆あったと思うが、それはそれでそういう場もある。そうであれば、そういう輪から自分はどういう場に行くかということを考えるのもその人の成長だと思う。あまり小さい時期からその子どもの特性因子に合わせて、丸い釘は丸い穴に入れるということを特化してしまうと、それはそれでその子どもの変化や成長、可能性等を狭めてしまうことにもなりかねない。どちらが良いというわけではないし、社会は変わっているし、人間も変わってきていると思うが、やはり両方の考え方がすごく重要だと思う。特に小・中学生の頃は子どもが今後社会に出ていく能力を磨くということが大事だと思う。一方で社会的な教育、自分が苦手な人とも寄り添える力や、学校は居心地が悪いと思ってもそこに通える力とか、そういうところも重要だと思う。嫌だったらすぐ出ていけば良いという話ではないと思っている。

今回ノーベル物理学賞を受賞した方はコンピュータ科学の博士であり認知心理学者でもあるので、コンピュータとかそういうものに人間が動かされていくという考え方はすごく怖いということに警鐘を鳴らしている方でもある。やはり人間の能力や可能性、そういうものもしっかりと伸ばしていくということを考えていくことも重要だと思った。一緒に考えていきたいと思っているのでよろしく願います。

林委員

先日、鎌倉市学校教育研究会に参加した。子ども一人一人の意見を繋ぐことによって学級を作るという内容の授業だったが、その授業を行うためには夜通し教材研究をして、夜な夜な子どものプリントを読む必要がある。働き方改革は度外視した教材研究をしている教員なので、一人一人の見取ができていればそういう授業、学級を作ることができる。昔はこういう授業が多かったが、現在は働き方改革上、そういう授業づくりは難しい。どういった授業づくりが良のか、我々も考えなければならぬと感じた。

高橋教育長

今回のかまくら ULTLA プログラムでも最初にアセスメントをするが、そこでは自分で学びたい、誰かと一緒に学びたくないという結果になる子どもが多い。共同より、個別の作業がしたいという子どもが多くいた。これを個別最適ということだけで言うと、孤立した学びになりかねないと思っている。AI やデジタル技術がこれだけ進展したことによって個別最適な学びが語られることが多いが、孤立した学びになってはいけないと思っている。かまくら ULTLA プログラムでは初めて同士の子どもたちではあるが、子ども同士の交流が生まれてきていた。先程も話があったが、コミュニケーションを取ることが難しい子ども2人がずっと縁側にいたが、職員を介して2人が話していた。一緒に学ぶことは良いと感じることによって、学びに向かう力が高まる。また鎌倉市は共生社会を推進しているので、そこで生きていくための流儀は学校やこういう学びの場で学ぶのだということ再認識した。どれだけデジタルが進んでも学校や共に学ぶ場自体は本当に大事だと思った。

また子どもたち一人一人を個別に見取って、練りに練った授業をやるとなると本当に大変なことであ

る。一人一人の個別最適や見取の部分を教員がプロの視点で全てやるということではなく、そこをまさにデジタルやテクノロジーを使ってやっていくという時代になっていくのではないかと思う。

そして子どもたちが好きな居場所という話があったが、自ら学びを掴み取っていく、ある程度勇気を持ってその学びのハンドルを子どもたちにも持ってもらうようにしていかないといけない。全部が全部、教員のプロの熟練の技術で行うということは働き方改革上無理があるので、教育の質向上というところと、学校の働き方改革が成立するような方程式というのを我々は追求しなければならないと思う。

以上で、本日の日程は全て終了した。これをもって10月定例会を閉会する。